

24分科会 まとめ

24分科会は当初リモートでの開催を見合わせる予定でしたが、合研事務局と共同研究者・司会者で協議した結果、情報交換だけでも実施できればと開催することになり、共同研究者からの呼びかけで集まった5本のレポートと「登校拒否・不登校問題全国連絡会」からの報告を柱にして分科会を開催しました。

まず、登校拒否・不登校問題全国連絡会のメンバーで、24分科会の共同研究者の門前真理子さんから「登校拒否・不登校問題全国連絡会」設立と活動の経緯と、「登校拒否・不登校、ひきこもり」の全国的な情勢について報告があり、これからも親の会の活動や全国連絡会の活動を通じて、日本の教育のみならず社会のあり方を考えていくことを目標としていると報告がありました。

続いて不登校の子をもつ保護者からのレポートが2本あり、明田川知美さん（北海道武蔵野短期大学）の「不登校児の事例報告と問題提起」では、中学生の子が別室登校中にSCから「診療内科の受診を勧められた」ことや、学校以外の居場所を探すことに苦心したこと、行政の教育相談センターや教育支援センターは「学校に戻すことが目的」で「（高校進学）の進路相談は出来ない」と告げられたこと、などが報告されました。二本目のレポートでは、コロナ禍による臨時休校明けから次第に登校できなくなった子に対して、親として学校に行かないことを理解していたつもりでいたが、つい「学校に行くことを迫っていた」自分に気づき、数ヶ月の葛藤の末に本人と向き合って「待つ」ことを決心したことが語られました。学校に行かない日常の中で、ボイストレーニングや家事の手伝いなどで子の成長している姿を見て、自身の中にある「能力主義」や「偏った価値観」を改めて問い直したことが報告されました。

明田川さんのレポートでは、①豊かな不登校ができる情報を提供できるシステムが学校に備えられるべきである、②公的支援機関では「中学校に戻ることが目的」になっていて、高校への進路相談学校も行われぬ。中学校に行かない選択肢を肯定できる社会づくりが大切であること、③子どもが生きやすい学校以外の居場所に対して、財政的な援助と行政からの不介入が両立される仕組みが必要、という問題提起がありました。

休憩後の三本目のレポートは、木村幸恵さん（小樽潮陵高校）の「現在の教育相談に辿り着くまでの道のり」でした。木村さんは高校で実習助手として勤務してきた経験から、生徒と接することや職場の教員と話をすることで「教育」について学び、教員免許や学校カウンセラー、ガイダンスカウンセラー、キャリアコンサルタントなどの様々な資格を取得しながら20年間教育相談に携わっています。「生徒の本当の気持ちを理解」したいと強く思い、また教育相談について学びたいという気持ちを持ち校内に教育相談室を設置し常駐しているという報告でした。小樽潮陵高校では2021年度から「ほっとルーム」という常駐の教育相談室を開設しています。相談がある生徒が来室しやすいように部屋を改装し、校内研修会も開き、教職員の理解を深めながら進めています。ほぼ毎日生徒が来室し、保護者面談も実施するなど設置した意義は大きいようです。日々の相談活動の中では、常に教員間の連携を心がけ、口頭のみならず重要なことは記録して生徒の状況を担任・学年主任・管理職・指導部長・養護教諭に配付し情報の共有を図り、担任が一人で問題を抱え込み孤立しないよう努めています。現在の学校現場においては、担任や担当の教員が問題を抱え込んでしまうことで、生徒にも教員にも不幸な結果になることが少なくありませんが、

このようなことを防ぐ手立てとしても教育相談が役立っていることが報告されました。

続いて新保敦さん（帯広柏葉高校定時制）の「教育政策と不登校問題」は、既に義務制で完全実施されている新学習指導要領が、学校現場にさらなる負担を強いていること、また公教育の変質が進められることで、不登校の生徒数が増えているのではないかという報告でした。このレポートに対して共同研究者の山田大樹さん（訪問と居場所「漂流教室」）から、目指すべきは「学校に行かないこと」が普通にある社会であり、レポートにあるような不登校の生徒が多くなることを問題とする視点を持つべきではない、との指摘がありました。最初の明田川さんのレポートでも「学校に行かない選択を肯定的に受け止めるキャリア形成の必要性」が問題提起されていて、新保さんも指摘の内容について受け止めていました。

最後に短時間でしたが共同研究者の田中敦さん（レターポストフレンド）から、コロナ禍におけるひきこもり支援の現状の報告があり24分科会は閉会しました。

尚、上記以外に、庄司証さん（函館圏フリースクールすまいる）が「渡島管内における不登校の現状と居場所支援の可能性」のレポートのみの参加でした。

閉会後の司会者共同研究者での打合せで、当初の目標とした情報交換の場所としての意義は十分果たしたが、リモートでは発表者以外の参加者の顔が見えづらく、今後の24分科会の開催については対面での実施が望ましいことを確認して終了しています。